

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第八主日(8/7)礼拝

「神の知恵」

使徒言行録第6章1節から15節

【聖書】

使徒言行録6:1 そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。2 そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。3 それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と“知恵”に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。4 わたしたちは、祈りとみ言葉の奉仕に専念することにします。」5 一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、6 使徒達の前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。

7 こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。

8 さて、ステファノは恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業とするしを民衆の間で行っていた。9 ところが、キレネとアレクサンドリアの出身者で、いわゆる「解放された奴隷の会堂」に属する人々、またキリキア州とアジア州出身の人々などのある者たちが立ち上がり、ステファノと議論した。10 しかし、彼が知恵と“霊”とによって語るので、歯が立たなかった。11 そこで、彼らは人々を唆して、「わたしたちは、あの男がモーセと神を冒瀆する言葉を吐くのを聞いた」と言わせた。12 また、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動して、ステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行った。13 そして、偽証人を立てて、次のように訴えさせた。「この男は、この聖なる場所と律法をけなして、一向にやめようとしません。14 わたしたちは、彼がこう言っているのを聞いています。『あのナザレの人イエスは、この場所を破壊し、モーセが我々に伝えた慣習を変えるだろう。』」15 最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使の顔のように見えた。

1 転換期

コロナ禍が始まってから二年半、私達の教会、私達の住む日本、世界は、大きな曲がり角に来ているという事を痛感させられることが続きましたね。教会は、コロナ禍の影響で求道者の方々が減り、礼拝人数が大きく落ち込んでいます。日本社会は、少子高齢化でどんどんと縮小し力がどんどん弱くなっている、とコロナ禍の政府の対応等で思い知らされました。世界規模でも、異常気象やコロナなど感染症の大流行、ロシアのウクライナ侵攻、この先、どのような方向に進んでいくのか、さっぱり見当が付きません。勿論、このような危機の

時、神が必ず道を示してくださる、と私達は信じています。ピンチこそチャンスの時。しかし、その天のみ神が指し示しておられる道を知るにはどうしたらよいのでしょうか。天の御神の御心は、私たち人間には想定外の道である事が多いように思えます。

使徒言行録第六章が描くエルサレム教会も、ある意味、私たちと同じように曲がり角に立っていました。弟子たちの急増を受けて、それまでのやり方がうまく機能しなくなっていたのです。それまで、教会に集う弟子たちは、主イエス・キリストから直接教えを受けていた人々でした。しかし、主イエスが父なる神の御許へと帰って行かれ、聖霊が降り、使徒たちによる宣教が始まり、エルサレムで大きく前進していくにつれて、主イエス・キリストを直接知らない人々が急激に増えてきます。その増えた弟子たちの中には、世界各地の離散の地より帰って来たギリシア語を日常語として話すユダヤ人、所謂ヘレニスト達も多かったようです。ギリシア語を話すユダヤ人であるヘレニスト達と、ヘブライ語、アラム語を話すユダヤ人であるヘブライ人たち、同じ主イエス・キリストの弟子、と言っても、生活習慣や考え方に大きな違いがあり、そこから諍いも生まれて来たことは先週も共に聖書に聴きました。ヘレニストの寡たちが食事の配給で差別される、という問題が起こったのです。主イエス・キリストの約束通り、御霊なる神が降り、この地上に姿を現したエルサレム教会ですが、今までのやり方を変えていく必要がある、使徒たちはそう考えたのでしょうか。実際、この時期を境にエルサレム教会の宣教の在り方は変わっていきます。いわば、使徒言行録第六章は、エルサレム教会の分水嶺です。大きな変革期を迎え混乱しそうな時、使徒たちは次のように提案します。「それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と“知恵”に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りとみ言葉の奉仕に専念することにします。」

教会の重要な業である弱く小さくされた人々の世話を、使徒たちに代わって果たす人々に必要だ、として挙げた条件こそ、変革期にある信仰共同体が、主イエス・キリストの体として宣教していくために、必要なものではないでしょうか。つまり「“霊”と“知恵”に満ちた評判の良い人」です。「評判の良い」というのは、「信頼おける、誠実な」という意味があります。信徒が持ち寄ったもので弱い人々の生活の世話をするので、その人々から、「あの人は良い人だけでも、お金にはだらしない」という人々には任せられません。「信頼のおける人に任せる」というのは、この世でも常識的なこと、教会以外でもあげられる条件です。

しかし、「“霊”と“知恵”に満ちた」という条件は、教会以外では挙げられません。使徒たちは、教会が分裂するかもしれない危機に際して、何よりも必要なものは、「霊」と「知恵」に満ちる事だ、と判断しました。「知恵」という言葉が使徒言行録では、エルサレム教会の宣教の分水嶺を描く第六章、第七章に集中している事からも分かります。今日は「“霊”と“知恵”に満ちる」とはどういうことか、ご一緒に聖書に聴いていきたい、と思います。

2 霊と知恵

“靈”というのは、勿論、聖靈なる御神のことを指します。では“知恵”とは何なのでしょう？知識とは異なり、もっと具体的で実践的なもの、というニュアンスがあります。先ほど交読文で共に読み交わした、知恵について謳っていると言われる箴言第八章にも次のようにあります。「知恵は、道のほとり、四つ角に立ち、城門の傍ら、町の入り口、城門の通路で呼ばわっている」とある通り。知恵とは、私達一人一人の生活の中で聞くもの、生きることに密着したもののようなのです。

私達は、日々の生活の中で、父なる神に祈り、聖書のみ言葉を通して道が示される、ことを経験します。そんな信仰の経験を通して身に就ける洞察力、判断力、を「知恵」と呼んでいいのかもしれませんが。「知恵」は、私達人間がその経験を通して得たもの。ですが、それも又、神が我々に働いてくださった結果です。ですから、「知恵」とは、神が私達一人一人に与えてくださる賜物、と言えます。使徒言行録第六章でも、神からの知恵を、「人間の知恵」とはっきり区別するために、「靈と知恵」という言い方をしているのでしょう。

3 神の知恵、イエス・キリスト

そのように考えていくと、この地上を真の人として生きた私達の主イエス・キリスト、このお方こそ、「靈と知恵」に満ち溢れているお方です。そこで、ルカによる福音書第20章が伝える主イエス・キリストのエピソードが思い起こされます。律法学者や祭司長たちが主イエスを陥れようと差し向けた人が、「わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」と主に質問しました。主イエスはデナリオン銀貨を持って来させ、「誰の肖像と銘があるか」と問われます。彼らが「皇帝のものです」と答えると、主イエスは、「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われました。主は、自分を陥れようとする者達の企みを見抜きます。しかし、そのたくらみを逃れる事だけをお考えにはなりません。「神のものは神に返しなさい」と神を信じて生きるとはどういうことかをはっきりと、ご自身を陥れようとする者達にも示すのです。まさに“靈”と“知恵”に満ち満ちておられるのは、イエス・キリストその人。

いえ、主イエス・キリストこそ、神の知恵そのもの。人間の知恵ではありません。キリスト・イエスが神の独り子、子なる神でありつつも、この地上に、私達と全く同じ肉体の中に、人となってくださったこと、更には、人間の罪を赦すべくご自身の独り子を贖いの犠牲へと差し出そうとする父なる神の御心に徹底して従いぬいた主イエス・キリスト。

私達人間は、自分達を神として、真の神を神とできない者達であるのに、そんな者達と同じ人間になり、そのもの達全ての罪をその身に負い、贖うために命を捨てる。人間の知恵ではありません。何故なら、私達には、主イエスも父なる御神も、私たちには「どうかしている」としか思えない行動だからです。そう、私達が「どうかしている」と思ってしまう程に、私たち人間から見れば、愚かにも程がある愛、義なる愛です。ですが、この人間には愚かにしか思えない程の義なる愛、愛なる義に徹する事こそ、神の知恵、イエス・キリストです。聖なる神

の愚かさが、人間の小さい自己保身の知恵を突き破り突き崩し新しい命、永遠の命を産みだしました。パウロが、十字架に架けられた救い主イエス・キリストについて次のように語っている通りです。「ユダヤ人には躓かせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。」(コリント I 1:23)

主イエス・キリストこそ神の知恵。先ほど、交読文で共に読み交わした箴言第八章は、「神の知恵」について謳った賛歌ですが、代々の教会は、箴言第八章は、キリストについて語っている、と解釈して、これを愛し、繰り返し詠ってきました。

「神の知恵」は、人が決して自力では捕らえる事のできない高いところにありますが、人の所に降って来てくださり、人間を神のほうへと高く引き上げ、そして神の出来事に参加させてくださいます。

そして、神の知恵は、聖霊なる御神の力が働いて、私たちの間で現実に現れるように思います。何故なら、主イエス・キリストが「神の知恵」であり、その証人こそ、聖霊なる御神だからです。「神の知恵」の証人である聖霊なる御神が働いてくださって初めて、私たちは、神の知恵に与ることができるのです。ですから、使徒たちが教会の変革期に必要なのは、「“霊”と“知恵”」だ、と見抜いたことは正しかったのです。今までにない道を示していけるのは、神の知恵、主イエス・キリストそのお方ですから。

4 神の知恵がもたらすもの

さて、そのような「“霊”と“知恵”に満ちた信頼できる人」として登場するのが、ステファノです。使徒言行録第六章は、ステファノの物語の序章と言えます。「スティーブン」「ステファン」というような名前、皆さんも一度は聞いたことがあるでしょう。それらのもととなる「ステファノ」という名前は、ギリシア語の名前、「冠」という意味があるそうです。美しい名前です。ステファノは、その名前から離散の地で生まれ育ち、エルサレムに戻って来たヘレニストの一人であった、と考えられています。私達は、彼の在り方に、神なる御霊と神の知恵が信仰者にもたらす恵に溢れた生き方を見出す事ができます。神の御心に適った目標を示され、その目標をしっかりと見据えて、状況に振り回されない生き方です。周囲の状況を見無視するというのではなく、冷静によく観察しつつ、しかし、状況に巻き込まれずに、目標を見失わない生き方です。

ヘレニスト達は、神殿にも参詣していたようですが、それとは別に出身地ごとにユダヤ教のシナゴグ、会堂を造り、そこに集って聖書を読み神を礼拝し、交わりを持っていたようです。一説によりますと、当時のエルサレムには、世界各地から帰って来たヘレニスト達が造った会堂が四百近くもあったそうです。パレスティナで生まれ育った使徒たちが、神殿のソロモン回廊で説教し人々を癒して伝道していたように、ステファノ達ヘレニストの弟子たちは、同じヘレニスト・ユダヤ人達がエルサレムに造っていたユダヤ教の会堂を宣教の場としてい

ました。彼らはパレスティナで普段使われていたアラム語をネイティブと同じように使いこなす事は出来ないからです。自分達が慣れ親しみ存分に使いこなせるギリシア語を理解できる人々に伝道していたのでしょう。9節の“キレネとアレクサンドリア出身で「解放された奴隷の会堂」に属する人々、またキリキヤ州とアジア州出身の人々”とあるのは、ステファノ達が伝道の間としていたユダヤ教の会堂に属する人々でした。

彼らヘレニスト達は、神を知らない異国のの人々に囲まれて生まれ育ちました。大祭司や律法学者、長老たちなどエルサレムの宗教的権威者をはじめ一般の人々からも、「生粋のユダヤ人ではない」と一段も二段も低く見られ、差別されていた、と考えられます。だからこそ、却って、律法などユダヤ教の習慣を生粋のユダヤ人よりも厳格に守り、神殿も大切にする思いが強かったのでしょう。自分達は穢れた神を知らない民ではなく、正真正銘の神の民である、とユダヤに生まれ育った人々に分かってほしかったのではないのでしょうか。その気持ちはわかるような気がします。

一方、ステファノ達は、中身を伴わない目に見える形式だけを大切にし、自己義認に墮落したユダヤ教の在り方を厳しく批判した主イエスの教えを宣べ伝えます。熱心なヘレニスト・ユダヤ人たちは怒り、ステファノに激しく反発して立ち上がり論戦を挑みます。それ自体は問題ある行いとは思えません。納得できるまで自由に議論することは、信仰においてとても重要なことです。ステファノは、聖霊なる御神に満たされ、神の知恵なる主イエス・キリストの言葉を与えたのですから、彼らがかんう相手ではありませんでした。論戦に負けた彼らは、プライドを傷つけられて怒りのあまり冷静さをなくし、完全に自分達の目標を見失ってしまいます。彼らの目標は、神の律法に従って生きることであった筈。ステファノとの論戦に負けたとしても、律法の教師の所へ行き、新たに学び直す道もあった筈です。勿論、ステファノの説教を受け入れ、悔い改めて、主イエス・キリストを信じる道もありました。しかし、彼らはそれらの道を選ばず、律法の根幹と言える十戒の一つ「隣人に関して偽証してはならない」を破ります。悪知恵を働かせて、人を使いステファノの意見を歪めて吹聴させたのです、自分達が罪を犯すだけでなく、他の人にも罪を犯させました。そして民衆やユダヤ人社会の指導者達をも唆し、ステファノを襲撃し逮捕させます。彼らが最も大切にしていた筈の律法と神のことを蔑ろにしたのです。

一方のステファノの方はどうでしょうか。彼は、暴力をもって襲われ、最高法院に引いていかれた時、随分と驚いたことでしょう。今まで、民衆は使徒達を支持し、大祭司たちの手先が使徒達を逮捕する時も、民衆に遠慮して手荒な真似はできませんでした。しかし、今、ステファノは、自分に襲いかかる人々の中に、ちょっと前までは使徒達の話に熱心に聴いていた民衆の姿を見出します。彼は、ヘブライ人の使徒たちに対する態度とは異なるヘレニストの自分への対応に、暴力的な差別感情を見出したのではないのでしょうか。それが人間の現実です。

しかし、最高法院に立つ頃には、ステファノはすっかり落ち着いていたようです。何故、落ち着けたのでしょうか。聖霊なる御神の力によって、神の知恵である主イエス・キリストのこと

を思い出すことができたからだ、と私は思います。ステファノの心に、使徒たちから聞いた主イエス・キリストの姿、ご自身が愛し抜かれた十二使徒の一人であるイスカリオテのユダの裏切りにあい、大祭司たちに引き渡され最高法院で裁かれた主イエス・キリストの姿が刻み込まれていたに違いないからです。又、つい先日、最高法院で堂々と伝道した使徒達の姿も彼の記憶には新しかったでしょう。その時に使徒達を支えた主イエス・キリストの言葉が、ステファノの胸の内にも響いていたに違いない、と私は思います。「わたしの名のために迫害を受けて王や総督の前に引っ張られていく。それはあなたがたにとって証をする機会となるだろう。だから、前もって弁明の準備をするまい、と心に決めなさい。どんな反対者でも、対抗も反対もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである」(ルカ21:19)

この主イエス・キリストの言葉から分かること、それは、「ステファノが霊と知恵に満たされていた」というのは、その場その場で主イエス・キリストが与える言葉と知恵をいつも祈り求めた神の御心に沿った知恵と言葉を求めて祈ったに違いない、という事です。「霊と知恵」それは、主イエス・キリストが求める者にお与えくださる人間の知恵では到底及ぶことない、神の言葉と神の知恵、私たち被造物である人間を神の出来事に参与させてくださる言葉と知恵です。

5 キリストの言葉に生きる事こそ、神の知恵

神の言葉と知恵を祈り求めたステファノの顔は輝いており、あたかも神のみ使いのようであった、とルカは語ります。それは、ステファノが、主イエス・キリストによって地上にもたらされた「天上の命」「神の国の命」を生きていた、つまり、聖霊なる御神に満たされ、神の言葉と知恵が与えられていたことを記しています。しかし、それだけではありません。この不正な裁判に、天の御神が、ステファノを通して確かに関わってくださっている、という事も述べているのではないかと、思います。

こうして始まったステファノの物語は、神の知恵である十字架と復活の主イエス・キリストに立ち帰り、祈りつつ、これに生きる事こそ、危機の時代を生き抜く神の知恵を与えられる道だ、と私達に教えてくれています。今日は八月の第一週、これから聖餐に与ります。神の知恵である、主イエス・キリストを思い起す恵に共に与る場を与えてくださる父なる御神に感謝します。